

## (1) 地域総合研究センターの活動実績 (2003.10~2004.3)

松本大学総合経営学部  
白 戸 洋

本誌は前号から紀要的役割と「地域総合研究センター」の研究活動の公表誌という2つの役割に本学教職員の多様な知的活動を「アニュアルレポート」として公表する役割が付け加えられることになり、発刊日も変更になった。したがって、地域総合研究3号(2003.10発行)では、2002年4月から2003年9月までの1年6ヶ月にわたる地域総合研究センターの活動が報告されていた。それに伴い、この号では、2003年10月から2004年3月までの約6ヶ月間の活動を次の1~8の項目について報告することになる。

1. コミュニティ・ビジネスについての研究・支援
  - ①支援事業      ②モデル事業      ③コミュニティ・ビジネスを通じた教育活動
2. 生活記録による世代間交流事業
  - 三郷村及木老人クラブとの交流学習会
3. 地域における学習事業への参画・支援
  - ①連続講座NPO学習会の開催      ②新村地区「ものぐさ大学」
  - ③松本市北部地区における若者と地域の交流事業      ④成人講座「女と男きらめき教室」
  - ⑤新聞をのみこむ講座
4. 地域のコミュニティづくり及び村づくり・まちづくりに関する研究・支援活動
  - ①松本市芳川地区まちづくりへの協力
  - ②まつもとユニバーサルデザインネットワーク研究会
  - ③アルプスフロント懇談会
  - ④国土交通省飯田国道事務所市民参加型道づくり事業への協力
5. 行政職員等の研修事業
6. 地域福祉経営に関する研究・支援
  - ①地域福祉経営に関する山形村と松本大学の協力
  - ②松本市介護保険実態調査への協力
7. 市町村合併問題に関わる研究・支援
  - ①小川村・信州新町・中条村社会福祉協議会合併検討委員会への協力
  - ②合併したらどうなる?地域自治と公民館のあり方を考える
8. 地域の資料保存と研究事業

## 1. コミュニティ・ビジネスについての研究・支援

コミュニティ・ビジネスとは、地域の住民が主体となり、ビジネスの手法によって自立的、継続的に、地域の課題を自ら解決していく地域密着型のスモール・ビジネスである。本センターは、平成14年度よりシンポジウムや講演会、また長野県によるコミュニティ・ビジネスを支援する事業・施策との連携を行ってきた。さらに、平成15年7月には、コミュニティ・ビジネスの発展を促進するとともに、モデル事業を展開していくことを目的として中間支援機関として「ながのコミュニティ・ビジネス支援センター」を本センターが中心となって設立した。「ながのコミュニティ・ビジネス支援センター」は、本学教員と外部理事によって運営され、事務局は大学内に設置されている。

本センターは、これまで①コミュニティ・ビジネスの発展のための支援、②モデル事業の展開、③コミュニティ・ビジネスを通じた松本大学の教育活動の展開に取り組んでいる。

### ① コミュニティ・ビジネスの発展のための支援

コミュニティ・ビジネスの発展のための支援として、講演会・研修会などへの講師の派遣やコミュニティ・ビジネスに関する研究、コミュニティ・ビジネスに関わる人材の育成などを実施している。平成15年9月から平成16年3月に7回にわたって開催された長野県北安曇農業普及センターの「農村女性のための仕事起こしセミナー」に協力し、第2回目の10月には「農村のコミュニティ・ビジネス」というテーマで、第4回目の12月には「安曇野における滞在型グリーンツーリズムの可能性」（概要は後掲）というテーマでそれぞれ本センター研究員が講演を行なった。また、平成16年2月には、長野県商工部による「長野県コミュニティビジネスシンポジウム」における基調講演、平成16年3月には塩尻商工会議所による「地域商業化セミナー」における講演「本音で語るコミュニティ・ビジネス」などを行ない、県下においてコミュニティ・ビジネスに関する普及活動を展開した。

### ② モデル事業の展開と支援

コミュニティ・ビジネスの地域における具体的な展開を目的として、モデル事業の実施と支援を行なっている。大学での授業や松本大学生協活動を通して、学生参加の道を開いている。具体的には、グリーンツーリズムや農業を中心とした安曇野地域における滞在型観光事業（これは採択には至っていないが、松本大学両学部、安曇野ちひろ美術館の共同で科研費申請も行われるまでになっている）、山形村社会福祉協議会による山芋の肉芽の商品化による「むかごちゃんプロジェクト」（これも山形村と松本大学との後掲するような内容で正式な協定を結び協働している）、松本市農協女性部による「松本一本ネギ」を利用した農村加工事業、まちづくりと環境保全を提起するNPO法人人々にやさしい街づくり推進協会による「ベロタクシーによるタウンモビリティ事業」など、地域の団体やグループと連携したコミュニティ・ビジネスの実践に取り組んでいる。

### ③ コミュニティ・ビジネスを通じた松本大学の教育活動の展開を支援

地域社会において将来活躍することが期待される本学の学生にとって、地域の課題をビジネスという手法で解決しようというコミュニティ・ビジネスは重要な意義を持つ。こうした位置付けのもとで行われている、コミュニティ・ビジネスを素材とした学習プログラムの支援に取り組んでいる。具体的な学習活動としては、総合経営学部地域行政コースの『演習Ⅱ・Ⅲ』における「松本一本ネギ」や「むかご」を活用したコミュニティ・ビジネスの学習・研究、総合経営学部の『地域開発』における「ベロタクシー事業」の実習、松商短期大学部の『特別研究』におけるグリーン・ツーリズムの学習・研究などが行なわれている。

また、学生の自主的活動の一つである松本大学祭「梓乃森祭」においては、地域交流とコミュニティ・ビジネスのひろばが開催され、学生が直接コミュニティ・ビジネスの活動を体験する機会となった。

## 2. 生活記録による世代間交流事業

平成14年3月より実施している生活記録を通じた世代間交流事業は、三郷村の及木（およびき）老人クラブによる交流学習会として、毎月一回継続的に実施されている。昭和30年及び現在の生活についての記録作りは、ほぼ15年度で年間の生活記録については終了しているが、若干の補足や食生活、衣料などの生活に関わるいくつかのテーマについての聞き取りを今後行なう予定である。また、これまでの記録をとりまとめ、「老人たちのおきみやげ」に続く第二弾の出版物として刊行する準備を進めている。(p. 239 参照)

平成15年10月8日

伝統行事「十三夜の月見」の再現（地域総合研究第3号に掲載）

平成15年11月1日

食生活「餅」について

麦ご飯：麦ご飯を炊いて「とろろ麦ご飯」を作る

平成15年12月13日 伍社宮にて

食生活「米・ご飯」について

平成16年1月17日

食生活「野沢菜漬け」について

正月料理の再現：お雑煮を作って食べてみる

平成16年2月21日

食生活「小麦食」について

甘酒の話：甘酒を現代の作り方（炊飯ジャー使用）と昔の作り方（堀こたつ使用）と飲み比べる

平成16年3月20日

食生活「味噌」について

うどん：手打ちうどんを作り、食べる

以 上

### 3 地域における学習事業への参画・支援

本センターは、長野県の特徴である社会教育の活動、すなわち公民館など地域における多様な学習活動に対して、様々な方法で参画・支援を実施している。具体的には、学習会・講演会の共催、講師の派遣、学生の参画、施設の提供など、エクステンションセンターと連携して、地域の学習活動の拠点としての役割を果たしている。

内 容：連続講座 NPO 学習会の開催

主催団体：連続講座「NPO 学習会」実行委員会（本学・中央公民館・NPO ネットワーク信州）

平成12年度より、毎月第2金曜日に開催されている連続講座 NPO 学習会「自分の知らない他人を知り、世間を広げてみよう」は、本センターと松本中央公民館・NPO ネットワーク信州によって構成される連続講座 NPO 学習会実行委員会が主催している。地域の住民の活動や NPO の活動事例をテーマとして学習することによって、多様な活動を活性化させ、あわせて地域のネットワークを創造することを目的としている。特に平成15年12月から3回にわたっては、「住民自治と行政を考える」というテーマで松本大学の学生が企画し、「まちづくり」、「公共事業」、「住民自治と行政を考える」について討論を行なった。

#### 平成15年

10月 保健婦さんスリランカに行く（青年海外協力隊OG・松本市保健婦 丸山貴恵氏）

11月 地域の健康づくり（松本市健康づくり推進委員会 小岩井美津子氏）

12月 大学生が語る「まちづくり」

ワークショップを通したまちづくり（土屋俊一）・地域開発の講義から（白戸洋）

#### 平成16年

1月 大学生が語る「公共事業」

まちづくりの現場から考えた公共事業（降旗一博）・市民参加型道づくりに関わって（荻原大樹）

2月 大学生が語る「まちづくり」

自転車で感じた街づくりの課題（一色智成）・街角コンサートから考える松本の街

内 容：新村地区「ものぐさ大学」の開催

主催団体：松本市新村地区公民館・新村地区福祉ひろば・松本大学共催

平成15年度には、大学の地元新村において、松本市新村地区公民館・福祉ひろば・松本大学が共同で「ものぐさ大学」を開講し、地域と大学が一体となって文化の薫り高い田園都市新村を築くことを目的として、6回にわたる講座を実施した。平成15年11月には、第4回ものぐさ大学として「京都研修旅行」が実施され、ものぐさ太郎の足跡を訪ねて太郎ゆかりの清水寺、平安神宮などを巡った。この研修旅行には、新村地区の住民30名が参加した他、松本大学観光経営コースの学生・教員など20名がアウトキャンパス・スタディとして参加し交流を深めた。今後も継続して実施する予定である。第5回は、「ダイエットと健康」というテーマで、松本大学の中島弘毅助教授による講義と実習が、第6回は、中野和朗学長による「ものぐさ太郎の比較文化論」という講演（概要 p.242）が行なわれた。

ものぐさ大学を契機にして新村地区の地域づくりはさらに活発となり、新村地区のイメージソングの制定や踊りの振り付け、CDの製作などが展開され、平成16年7月31日には、地区の住民、保育園から小学校、中学校、本学などが参加して1500人の参加を見込んだ「新村音楽祭」が予定され

ている。また、これらの活動については、平成15年度松本市公民館研究集会にて実践事例として報告が行なわれた。腰原哲朗教授による論文「ものぐさ太郎の系譜」(p.186)も執筆されている。

内 容：松本市北部地区における若者と地域の交流事業への参画  
主催団体：松本市北部公民館

平成13年度より、住民のまちづくり組織である「こんな町つくろう研究会」と北部公民館が、松本美須々ヶ丘高校生徒会、松商短大（現松本大学）の学生とともに始めた意見交換会は、松本市北部地区における若者と地域の交流事業に発展した。さらに平成14年度以降、丸ノ内中学、旭町中学、松本大学エクステンションセンター、安原公民館、城北公民館が参加し、意見交換会や「街角コンサート」（本学吹奏楽部も参加）の開催を行ってきた。

平成15年12月には、「地域での人権」、「平和憲法（イラク自衛隊派遣）」、「新しくなる街並み（中心街の空洞化）」という3テーマについて、中学生から高齢者まで約40名が参加して意見交換会が開催された。

内 容：成人講座「女と男きらめき教室」  
主催団体：塩尻市塩尻東公民館

身近な地区において地域に女性が参画して共生のまちづくりを進めることを目的として、平成12年度より開始された「女と男きらめき教室」（塩尻市東地区公民館主催）は、本センターから研究員がコーディネーターとして開始時より継続的に参画している。

内 容：新聞をのみこむ講座  
主催団体：松本市南部公民館・勤労青少年ホーム

松本市南部公民館・勤労青少年ホームとの共同事業として、主に若者を対象とした「新聞をのみこむ講座」を平成15年12月より開催している。参加者がそれぞれの関心に沿って政治経済、時事問題や社会問題などの持ち寄った新聞記事を素材として、本センターの研究員がコーディネーターとなってディスカッションをおこなうもので、毎回若者を中心に20名程度の参加者によって進められている。

#### 4 地域のコミュニティづくり及び村づくり・まちづくりに関する研究・支援

本研究センターは、地域コミュニティの再構築をテーマとして、各地の地域づくりへの支援や参画を行なっている。また、むらづくりやまちづくりに関する各地の取組に対して、松商学園短期大学総合研究所の時代より、様々な支援を行なっている。さらに平成16年度においては、新たに奈川村のむらづくり（奈川村役場）、塩尻市中心商店街活性化への協力（塩尻市・塩尻市商工会議所・大門商店街振興組合）について、学生の参画を通じた協力・支援を行なう予定として、その準備を実施している。

内 容：芳川地区まちづくりへの協力  
主催団体：松本市芳川地区公民館

松本市芳川地区公民館による地区のまちづくりを考える「芳川カエルまちづくり研究会」に研究員がコーディネーターとして参画している。月に一度、開催される研究会では、「子ども」「福祉」「まちづくり」「町内会」などのテーマを中心として討論を行なっている。今後は住民が主体的に行なう具体的な活動・事業につなげていくことを目指している。

内 容：まつもとユニバーサルデザインネットワーク研究会  
主催団体：まつもとUDネットワーク研究会

この研究会は、ユニバーサルデザインの考え方の研究と普及、すべての人にとって「使いやすいものづくり」の提案、すべての人が「暮らしやすい街づくり」の提案、すべての人に「やさしいサービス・情報」の提案を目的として、「ユニバーサルデザイン」に係わる企画運営に関することや「ユニバーサルデザイン」に係わる広報宣伝活動に関する事業などを展開しようとしている。この研究会の会長に本センター研究員が着任している。

研究会は、平成16年1月に設立され、毎月定例でテレビ信州松本本社を会場に会を開いており、平成16年7月に「ながのユニバーサルデザイン松本大会」を実施しようとして準備に入っている。

内 容：アルプスフロント懇話会  
主催団体：（社）松本青年会議所NPOボランティアコミュニティプラザ設立委員会

地域における民間非営利組織（NPO）活動の発展をめざし、新たな市民社会の実現に向けて、地域の市民セクター自らの手によるNPO支援組織として、幅広く地域や分野を越えたNPOの活動基盤強化を図り、NPOと企業や行政とのパートナーシップの形成を促進するためのネットワークを構築しようとしている。

以前から本センター研究員が懇話会メンバーとして活動している。この中で、JC5カ年計画の最終年を迎え、プラザの立ち上げを、様々な参加NPO団体と共に考えている。

内 容：国土交通省飯田国道事務所市民参加型道づくり事業への協力  
主催団体：国土交通省飯田国道事務所

平成15年11月より国土交通省飯田国道事務所による市民参画型道づくり事業として実施されている「市民フォーラム準備会」に、『演習』『地域開発』を受講する学生のアウトキャンパス・スタディの一つとして参加している。市民が参画してみちづくりや道路管理を行なうことを目的とした事業の一環であるが、平成15年度に3回の会議が開催され、本センター研究員と学生が討論にも参加している。

## 5 行政職員等の研修事業

本センターでは、行政職員などを対象にして、以下のような研修・学習事業を実施している。

名 称：地域福祉に関する職員研修  
 対 象：松本・塩尻・東筑摩・南安曇郡社会福祉協議会職員  
 期 間：1日（平成15年12月）  
 相手先：長野県町村会

名 称：ワークショップによる住民参加手法の研修  
 対 象：豊科町職員  
 期 間：延べ8日間（平成15年12月～平成16年3月）  
 相手先：豊科町（企画課）

## 6 地域福祉経営に関する研究・支援

本研究センターは、少子・高齢化の中で重要とされる地域福祉をテーマに、住民主体による地域福祉経営の観点から研究・支援を実施している。

内 容：地域福祉経営に関する山形村と松本大学の協力  
 主催団体：山形村

東筑摩郡山形村とは山形村社会福祉協議会を通じて、本学の教育活動と連携しながら、共同プロジェクトとしていくつかの課題に取り組んでいる。山形村の福祉づくりと大学生の地域の中での育成を目的として、協定を結び平成17年3月31日を期限として、協力を行なっている。

①ボランティアセンターにおけるアシスタント・コーディネーターとして学生の派遣やコミュニティ・ビジネス「むかごプロジェクト」への学生の参加など、インターンシップを通じた地域福祉事業の支援の実施、②地域福祉経営学習会の開催やコミュニティ・ビジネスに関する共同研究とモデルプロジェクトの実施と評価などの共同研究の実施、③社会福祉協議会地域福祉推進委員会や講演会・研修会などへの教員の講師としての派遣、④地域福祉計画策定への教員・学生の参画と協力などを実施している。（p.244 参照）

内 容：松本市介護保険実態調査への協力  
 主催団体：松本市健康福祉部

松本市健康福祉部が実施した介護保険に関する実態調査に関して、調査結果の集計、解析を行ない報告書を取りまとめた。

## 7 市町村合併問題等に関わる研究・支援

本研究センターでは、市町村合併に関わる様々な課題について、多様な視点から研究を行なうとともに、地方自治体、社会福祉協議会、社会教育機関、NPO、地域の団体・グループなどからの依頼にもとづいて、行政の委員会などへの人員の派遣、学習会・講座の開催、講演会・研修会への講師派遣、アドバイスなどの支援活動を実施している。

内 容：小川村・信州新町・中条村社会福祉協議会合併検討委員会への協力  
主催団体：小川村・信州新町・中条村社会福祉協議会

平成15年10月より長野県の北部にある小川村・信州新町・中条村の3村の合併に伴い、社会福祉協議会の合併について検討を行なう合併検討委員会に研究員がアドバイザーとして参加している。

内 容：合併したらどうなる？地域自治と公民館のあり方を考える  
主催団体：松本市中央公民館・松本市南部公民館

「合併したらどうなる？地域自治と公民館のあり方を考える」というテーマで、直面する合併問題について、行政職員と市民、研究者が議論を行なう機会として、7回の講座を松本市中央公民館・松本市南部公民館と協力して開催した。「松本市をとりまく合併の状況」、「公民館の本質を問う」、「四賀村の公民館活動の現状と課題」、「松本市公民館の現状と課題」、「地域自治と公民館」などをテーマとして実施された。

## 8 地域の資料保存と研究事業

昨年度は、須坂市保健補導員制度の資料の収集、整理し、関係資料はマイクロフィルムに記録され保存されている。

今年度は、安曇野モダニズムの場の一つであった清沢清志家の、歴史的な書簡類や蔵書の調査を行った。腰原哲朗教授やゼミ生の他、穂高町の歴史家中島博昭氏が当主清沢稔氏の了解を得て行き、コンピュータ処理には鈴木尚通教授や学生が当たった。成果は中間報告として、松本大学研究紀要第2号に掲載されている。